

夏目成美について

川 島 つ ゆ

魚提げて柳がくれにもていりぬ
朧夜や吉次を泊めし椀のおと
白ぼたん崩れんとして二日見る
ふはとぬぐ羽織も月のひかりかな
のちの月葡萄に核のくもりかな
人ゆけばやがてしぐるる野中かな
炭なしといふ声小夜も更けにけり

成美家集より

都会風に洗練された清雅な俳境である。成美は乙二・道彦と共に寛政三大家とも、または完来・道彦・巢兆らと共に江戸の四大家とも呼ばれている。しかし、成美の特色はむしろ、彼等業俳に伍して徒らに俳壇の勢力を張ることに専念することなく、一党一派に偏することもなかった。しかも、彼の属する生活環境、江戸浅草蔵前の札差連衆の中では、俳諧はおおむね高級なたしなみであり、交友の具ともいうべきであった。その中にあって成美は少年時代からその死に至るまで、店務を兼ねながら俳道一路に執した。筆まめな彼は

夏目成美について

年々旬日記を認めたらしく、現在知られているものだけでも、「杉はしら」安永八年・同十年・「いかに」天明三年・「あかつき」同二年・「手ならひ」同四年・「一陽集」同六年・「谷風草」寛政三年・「厚薄集」同三年・「随斎句藻」同五年・「随斎句藁」同七年・「はらはら傘」同十三年等、これらは天理図書館に蔵されている。これらの旬日記から秀句を抜いて更に稿本「成美家集」「続成美家集」を成している。板本「成美家集」はこれらをもとにして編集されたものと思われる。その他「七部集纂考」「随斎諧話」等、殊に後者は考証的でありながら趣味深い材料を平明率直に記述したもので、著者の人柄学識の広さもうかがわれるものである。なお文集「四山藁」巻一、巻二は、当代の諸家から乞われた夥しい序・跋及び記・文等を安永から寛政にかけてほぼ年代順に集めたもので、なお続刊の予定であったらしい。著書には前記の外「糶汰瓶」じんたかめ（成美と弟吟江を中心とする歌仙二巻と四季発句を含む）「浅草ほうご」等の数種がある。成美はみずから「俳諧独行の旅人」と称しているが、これは俗流の党派争いや、名譽欲・金錢欲にかかずらう連衆から超然たるみずからの境地を言ったもので、実は、夏目成美を出現さすべき母胎は

既に彼の出生前からとのえられていたのである。藏前の連衆は享保年中箱根に隠棲していた祇空の人格を慕うて子弟の礼をとり、この一派を四時観（彼等の編した著書名による）と言った。その有力な弟子莎鷄（後に祇明、初号祖泉）は伊藤家の長男で、その弟を宗成、次弟を福来、祇明の子を来徳と言った。この祇明こそ成美の伯父であり、その弟宗成は父であった。祇明追善集に見える「頓心法師伝」（荻野清氏「成美に関する覚書」国語国文昭二一・一一）によると「泉、つねに家の業を勤てうまず。人に交りていんぎんなり。宗・福是に習ひて大賈の器あり。故に商賈の人、子として養ふ事を望むもの多し。時至りて宗・福良家の子となる。はたして其業をつつまやかにして、其家をととのふ。是泉が徳のおよぼす所也。泉、餘力ある時は俳諧を学ぶ。有紀堂に寄りて表徳を莎鷄と定む。有紀堂是をばげまして日毎に一ツの題を出す。一日も怠る事なく、狂句三百六十句を吐事十有餘年」とある。有紀堂は祇空以前の師である。また「生涯旅をこのめども、多病にしてはたさず、依て神奈川といふ里に、かたのごとく舎をもとめ、近きを遠き旅になぞらへ、其心を養ふ。花の降日は上野にうかれ、月のさかりはかな川に嘯く。此往來の秀句狂句あげてかぞへがたし」ともある。これを不用意に読む時には、荻野氏も言われるごとく、成美伝とまちがわれるほどの類似点が見出されるのである。

大賈の器ありとまで評されている父宗成については、別に、成美の書いた「私家小系」にも「潤達にして弁才穎智あり、また老実小心のところもおはしき」とある。こうして五代目の井筒屋八郎右衛門となつた宗成は、十五歳年下の妻との間に成美をあげるに至つた

のである。宗成もまた兄祇明と共に俳諧を学んだ。なお祇明の妻も叔父の福来も、祇明の後を承けて伊藤家を継いだ来徳も、その妻及び三人の子らも、いずれも俳諧をたしんだことは祇明追善集に見られるところで、これほどに一族をあげて俳諧に心を寄せた例は、元禄期における鳴海の知足一家、もしくは大津の智月尼一家などに、わずかにその例を求められるばかりであろう。このような血縁にかこまれた成美であったが、伯父祇明の死んだのは寛延元年十月四日で、成美の生誕はそれから三ヶ月目の寛延二年一月十日であった。その時、父宗成は四十五歳、母は三十歳になっていた。おそい子持ではあるが、成美に先立つ四人の男児が夭折したので、今度こそはという願いをこめて、未亡人となつた祇明の妻にその養育を託したので、成美は三、四歳のころまで伊藤家にあつた。その後夏目家ではまた男子を恵まれた。すなわち弟庄兵衛である。

父宗成は明和元年六十歳で家督を成美にゆずり、その翌年剃髮して今戸に隠棲したという。その俳諧活動は兄祇明にくらべると格段の相違で、いわゆる旦那藝の域を出ぬものようであった。「私家小系」によると、宗成は若いころには太鼓を打ち音曲をよくしたという。はで好きであつたらしい。とは言え「業をつとめて力を惜まらず、同業のものおし尊みて親の如く思へり。わが業の掟なども十に八、九は父の定められしなり」（私家小系）とあつて、仲間からも頼もしがられる積極性のある人物であつたと思われる。

成美が家督相続したのは十六歳の時であるが、十八歳の時に痛風をわずらつて右足の自由をうしない、それ以来長く脚病に悩まされて箱根以西の旅の経験を持たない。このことは彼をして一層俳諧に

精進させる宿縁となつたかと思われる。弟庄兵衛は成美に似て穩かな人物であつたらしく、脚疾の兄をたすけて夏目家の大世帯を切りまわしていたが、殊に吟江または陽子を号して俳諧に執心であつたことは、兄成美のこの上ないよろこびであつた。兄弟たがいに励ましつゝ、安永八年には兄弟の合著ともいふべき前記の「糶汰瓶」を上梓するまでになつた。しかるに、それから四、五年を経た天明三年、この弟をうしなつたことは、成美のかぎりない恨事であつた。

(前略) 陽子なくなりてより後、われ世にいけるかひなし。われさらに陽子をわする事なし。陽子、地下にわれをなにかおもふ。

ひととせはよくもへにける命かな

又「陽子なくなりてのち、狂句をかきふしもなき事をくゆ。ひとたびは亡人をかなしみ、ひとたびはのこれる命をめづらしとおもふ。悲憂かはるゝ胸をせめてころほれたる如く、狂せるに似たり」とも哭している。当時成美は三十五歳、庄兵衛の享年は不明であるが、三十歳前後でもあつたらうか。庄兵衛については、成美が病弱のために井筒屋を弟にゆづつたが、弟が病死したので再び成美が主人になつたと伝えられているが、旧幕時代の「札差株帳」(東京上野図書館蔵)によると、享保九年、大岡越前守時代、札差の人数が極つて百八人の署名連判がある。この時の井筒屋八郎衛門は成美の父宗成であらう。なほ安永三年十月六日附の触れ書きに

浅草瓦町家持

井筒屋八郎右衛門弟義致同店候

讓請人

井筒屋 庄兵衛

㊦

右

井筒屋八郎右衛門

とある。安永三年は庄兵衛の死に先立つ十年前であるから、若い庄兵衛は札差として独立しながらも、なお兄成美の許にあって、日常兄を援けていたものと思われる。なお札差の株は、その後九十六軒と定まつたらしく、文政七年(成美・庄兵衛没後)札差住所書等にも井筒屋八郎右衛門・井筒屋庄兵衛共に記録されている。そのままで明治時代となつたものであらう。

成美には先妻との間にもうけた長男の外に二男・三男・四男共にそれぞれ俳諧の仕事(成美の遺稿整理など)にたずさわっている。弟庄兵衛をうしなつた後にもうけた糸という娘があつたが、これも六歳で死んだ。

六になりける娘の、そのかの母と手たづさへて董ほり、つばなぬきてあそぶに、あるやんごとなき方の花見し玉ふとて、上臈たちの立ありきつゝ、あこよ、名はなにと、としはととひたまふに、ふしめになりて、名は糸とまうす。年はこれとて、ゆびひろげたるに、みなあいきょうありとてわらひ給ひぬ。たかき人に名をきこえあげしを、かれが一世のめいばくにして、そのみな月なくなり侍しが、ことしかの花の陰もなつかしく、ひとりすみだ川に杖ひきて花見ありくに、さらにこころもなぐさまず、古墳の柳のみ風にうごきて、したふがごとくうらむが如し。

しなばやと桜におもふ時もあり

と、女々しいまで正直に父親の歎きを訴えている。成美は寛政三年ころ葛飾多田森に別宅法林庵をかまえたが、そこに常住したのは数

年後のことである。恐らく三十歳前にあげた長男に、安心して家業をまかせ得るようになってからであろう。荻野清氏の引用されている雀の「『はいかい随齋成美集』」の中に、

当年より三ヶ年之間、極けんやく年百五十兩、小遣諸色は本家より送。庵中女二人は別居同様の住居にして、成美妻は早世を過し、妾は昔の其名高く、五明楼の逢ふだても（大立物）、しらぬ顔のやさ姿……

とあるという。右の当年はいつのことか不明であるが、極けんやくと言つても、同時代の一茶が十三年にわたる骨肉争議の決着として、異母弟仙六に対して十三年間の家賃・粗代（父の遺言を実行すれば折半すべきであった）として三十兩請求したのに対して、決局仙六が十一兩二分を支払わされていることから見ても、都鄙の差こそあれ、生活必需品を本家から送られた上に、年百五十兩の手当は、大家の別宅として乏しからぬものであつたらう。それよりも、荻野氏も理解に苦しまれるのは、この「女二人」である。先妻は長男をあげて後没したのであるから、三男二女をもうけた後妻があつたはずで、後妻即妾か、後妻の外に妾があつたのか、一切不明である。昔の人は身辺のことを語りながらぬもので、成美の場合も、

亡妻の祥月に墓まうでしける時、をさ

なきもののおとを追ければ

子をつれて行かひもなし墓の霜

亡妻が墓まうでして

塚の霜われも昔にはちかき身ぞ

などが見出されるばかりである。なお成美には糸女の後に生れたせ

い女があるが、この「女二人」の中に娘を加えることは不自然のようには思われる。荻野氏はなお「いずれにしろ此の文による限り、成美には妾があり、しかもそれは水商売上りの女だったことになる。

こうした事実がはたして信ぜられるかどうか、それが第一の問題なのである。次に、もしこの事実をうけ容れるとすると、三男二女を儲けた後妻とは如何なる関係にあるのか、此の妾が鵬齋（墓碑銘）の伝える後妻と同じ人物なのか、あるいは妾は妾、後妻は後妻で別な存在なのか、その点に疑問が起きてくるのである。妾の問題は、多分否定しても宜いと考えるけれども、一方にわか打消しがたいようにも思う。わたしが否定的な見方に傾くのは、あの精勵で誠実で温厚で、その上右足の自由を欠いた成美と、水商売上りの妾との間にそぐわぬものを感じるからであり、しかもなお頭からその事実を抹殺して了うのに躊躇せられるのは、蓄妾を悪徳と考えず、殊に夏目家のような裕かな商家では極めて有りがちであつた当時の風習を思うと共に、よしんば妾を家庭に入れたにしても、波風を立てずに処理してゆけたであろう、成美の包容性なり……一茶の「句稿消息」に与えている劇評もどきの文や……相当の苦勞人であり、やはり時代の児であつた成美の一面なりを思うからである」成美の愛好者である荻野氏が、とかく否定説に傾かれるのは無理ならぬことであるが、成美は「御藏前馬鹿物語」（一名十八大通）を名に連ねている札差の一党であつた。彼らは髪形も藏前風、藏前本田などと呼ばれて通を競い、あらゆる奇抜さ、贅沢さを誇つた。下野屋十右衛門、俳号祇蘭は、ある年相模大山石尊大権現に奉納の木太刀を三間半ほどにこしらえ、土地の若者四、五十人に揃いのゆかたを着せ、

掛け念仏で大通り芝口から高輪にさしかかり、自分は好みのゆかた、鮫鞘の一腰をさして、ふとんを重ねて駕籠に乗り、左右の戸をひらかせて先達し、ほどなく品川の宿入口にさしかかるころ、あとから召捕の役人が来て、祇園を駕籠から引きおろして、暫く入牢申しつけられたという。あまりに身分不相応な所業を咎められたのである。その後寛政の改革があつて、昔のようなことはなくなつたが、とまれ派手な伝統を引く藏前の札差の中にも羽振のよかつた井筒屋八郎右衛門が、仲間と共に、時に吉原の大門をくぐるようなことがなかつたとすれば不思議である。

あなにくや鶴老鬼婆のたくひ、剣をぬきて追しといふ古こともおもひ出て

よし原の蠅になげうつ小判かな
など、彼みずからの心眼に映じた浅ましい廓の実情であつたろう。なお、荻野氏の疑問とされるのは、『続成美家集』文化二年の条に、「去年よりやしなひける娘の、子うみてのちえやみのやうにてわづらひけるを、とかくあつかひにけれども、葉のしるしもなく、いたづらに見なしける時」と前書して、

朝がほもさかずたとへむかたもなし
の句のあることである。子福者の彼が特に養女をするはずもなく、息子の嫁とも見られないので、「去年よりやしなひける」をどう解釈すべきか、あるいは他処に生ませてあつた娘を引取つて世話をした、というような事情ではなかつたろうか。

俳人としての成美はきびしかつたろうと思う。一党に偏することなく、当時の有名無名人の訪うにまかせて、七の日毎に随齋会を催

夏目成美について

うしていた。(後には七の日だけになったが)そのメンバーの一人である一茶は、三十歳から三十六歳にわたる長期の西国行脚を終えて江戸入りしたのが寛政十年であつた。江戸も場末の本所大島の無住同然の愛宕社の道具小屋をねぐらにしたり、やがて相生町五丁目の裏長屋に住んだ。そのころ、文化二年ころは殊に窮乏していたらしく、日記に「随齋朝飯」の書入れが目立つ。既に多田の森に隠棲していた成美の家の台所まで、相生町五丁目から小一里の道を、空腹をかかえて歩いて行つた四十三歳の一茶である。表面友人扱いはされても、大家の大旦那と素寒びんの一茶が対等につきあえるわけではなかつた。一茶の唯一の生活資源である田舎俳人相手の周期的な下総行脚のかえり道にも訪うことが多く、女中共がはやり風邪で寝込んだために留守居に頼まれたり、時には仏面の手入れなども手伝わされた。文化七年十一月二日、この日も一茶は下総からの帰途であつたが、主人成美は隅田川の紅葉を見物に出かけた。その留守中金子紛失のことがあつて、翌日から大搜索となつて一同禁足された。一茶の日記に「我モ彼党ニタゲヘラレテ不許他出」とある。六日には成美は本家に入っている。八日になつて禁足は解かれたが、この間一茶に対して何等の考慮の払われた様子もない。このことだけでも奉公人以上には扱われていなかった一茶の地位を思わせる。俳諧(連句)の場合にも成美の態度は極めて潤達で自由で、ともすれば膝をまじえている一茶を揶揄するかのようなどころがある。文化二年十月二十七日の随齋会における両吟に、

日本紀をひねくり廻す癖ありて

など、一茶がその著『方言雑集』の考証に、記・紀などを引用して

いる術学的な一面を円滑に諷したものであり、又、享和三年作と確認される成美・雲外（一茶が愛宕社在任時代に用いた号）両吟歌仙に

破ほうろくに秋風の吹

家越する癖も直らず四十迄

雲外
成美

など、長期の行脚以後転々として居所も定まらない一茶に取材したものである。当時一茶は四十一歳になっていた。

一茶は文化十年五十一歳で、かねての念願通り故郷に帰住することになったが、江戸俳壇から疎隔されることを恐れて、帰住早々から数回にわたって成美に点を乞うている。成美はその句稿に、劇評もどきで評を加えている。

頭取曰、当座のたてもの外に真似人なし、いづれもさま、おつしやり分はふりますまい^{【イイキ】}いひぶんがあるのなといふ事があるものか、日本中引くるめての名人^{【ある】}情がこはくて一ツ風流だから切落は請とらぬ。雪の中でお念仏でもいつてゐるがいひ^{【イイキ】}此とうのいものとうへんぼくめ、鍋の中へたゝきこんで杓子のむね打をくらはせるぞよ^{【團圓】}東西くまづ藝評にかゝりませう。

注、頭取は楽屋一切の監督を兼ねる俳優。切落は江戸時代の劇場の平土間の最前列、見巧者の入る所という。

そして同じく評判記風に「極上上吉」「上上吉」「上上」などと評点を下している。生粹の都会人である成美には、一茶のよさも、とうへんぼく振りもよく分っていたのである。そして「惟然坊が酒蔵におち入らんことをおそる也」とか「ぼた餅、御の字、地藏、あ

こ。右は貴翁の口癖のやうにてめづらしからず候」などと、急所急所でチクリと針をさしている。このように成美は六十台に入っても、その俳諧活動はなお衰えなかつたが、一方若い時からの脚病は次第に昂じて歩行の自由をうばうまになつた。

脚病一步をすゝめず

名月を追ふてひけく庭むしろ

「あられ供養」に収められている成美の文によると、子息らの懇請によつて、多田の森から本宅の近くに居を移したのは文化十一年夏であつた。なお「俳諧三箱」によると、その翌年十月五日夜中風を発して、一時は危ぶまれたが、翌年春から夏にかけて小康を得、枕をはなれて月見するまでになつたが、九月半ばから喘息の発作があつて、十一月十九日の晩六十八歳で没した。

麻布飯倉に住んでいたという芝山の「武総一日行脚道の記」（俳家成美全集所載）に、「（前略）小もどりして柳橋を渡り、随齋の病床を訪ふ。此日、翁いささか快して一、二句を見せらる。予もしばらく草鞋をとく」と前書して両吟半歌仙がある。

世につれて鮒も尾をふる若葉哉
我も若葉に筆揮ひけり

成美
芝山

以下略

芝山がこれに添えた文中に「此翁、常に沈吟を好まず。去年の秋より病に伏して殊更早吟なれば、半時に足らず一折なる。既に午時の鐘をきく、勝手方より御膳がよいと、松風の音する茶釜の湯漬、寶主三碗を過ぎず。食後、翁午睡につく。予は行方を急ぎ去る」とある。半時は今の一時間であり、一折は半歌仙十八句をいう。病床

にありながら達者なものである。一茶をはじめ随齋会の人々は、このような成美の手腕にきたえられて来たのであった。

成美は「わかき時より虚弱多病なるを、亡父のつねになげき思はれしに」と嘆じていたその亡父と同じ六十八歳の寿を保ち、又、彼の母は、夫の没後三十年存命して、弟息子の庄兵衛をさえうしなつたので、一筋に成美をたよって「わがなくなりし次の日に、そののなくなるともせんかたなし。あなかして、わが命のうち日に一日なりとも先たちて、かなしきめなみせせ、と折くの玉ひし」（続成美家集）という母も、成美五十四歳の時に見送ることができた。息子は四人で、末男はまだ幼かつたらしい。娘せいは他家に嫁していたようである。成美は最愛の弟庄兵衛をうしない、可憐な杀女を先立てたうらみこそあれ、家運は隆盛で、その一生はまず幸福であったというべきであろう。

最後に考えさせられるのは、井筒屋では成美の生れる前に四人の男児が夭折していることと、『御蔵前馬鹿物語』に見える記事との関連である。『御蔵前馬鹿物語』一名、十八大通（東京上野図書館蔵・日本随筆大成第二期卷六には「十八大通」として所収）は弘化三年の成稿で、著者は六十三翁二三寿老人となっている。みずから蔵前仲間と称している。解題によると別号を珉齋閑人と称したという。逆算すると、宗成没後十二年目に生れている。

昔安永、天明の人物抜書は物語り聞しが、中むかしの寛政享和には書しるす程の事なし。亦々文化、文政の御時節には風俗かはれど、いにしへ元禄の男達の風俗残りて土地がら面白し。今の世は蔵前も商人同前にて、其上風俗替り、洒落も思ひ付も馬鹿者も一

夏目成美について

人もなし。されど二、三十年跡迄は、おかしく馬鹿く敷者も見へたり。爰にまじめな井筒屋八郎右衛門、京登りして上方女郎に馴染、此芸子を七百両程にて身請し、江戸へ引取り茅町へ油見世を出せり。此女をおあいといふ。いつか、かさで鼻がひしやげておはりぬ。高いものとするべし云々。

二、三十年前と言えば成美の晩年に属するが、脚疾のために箱根以西の旅の経験を持たなかった成美であろうはずはない。すると、太鼓を打ち音曲をよくしたという成美の父宗成の若盛りは一世紀も前のことであるが、時の流れのゆるやかであった時代には、同じ蔵前者のうわさが、昨日のごとく語り継がれていたことであろう。この話をどこまで信じてよいかわからぬが、明治時代までも伊勢参宮や上方見物で病毒を得て来た例が多く、私の母（埼玉県北部住）など、どここのたれと名指しできるほどであった。と、すれば宗成をなかだちとして、病毒は夏目家を冒したわけで、相継ぐ男児の夭折も、成美のからだの虚弱であったことも、その遠因を求められなくはない。なお成美の一生を悩ませた痛風——主として足の親指からおかされて激痛を伴う病気で、特殊な病毒によるものではないというが、あらゆる男女の病気を疝氣・寸自で片付けていたような漢法時代にあつては、成美の病氣も疑えば疑えるのである。

参考。「成美に関する覚書」荻野清（国語国文、昭二・一一）
なお「札差株帳」等は、数年前東京上野図書館で筆写していただいたものであるが、旧幕時代の事情について明らかならぬ点があるので、同図書館の蔵書その他について再検討されたい。